

『二都物語』あるいは「シドニー・カートンの物語」

田 辺 洋 子

「二都物語」はタイトルからも明らかなように、仏革命の舞台となったパリと、革命は起こらなかったが同様に危険な矛盾を抱えていたロンドンとを歴史的な目で公平に捕え、比較しようとしたものである。しかし、史実に照らしてパリが不利に描かれるのは無理ないとしても、そこに作者の個人的な偏りがあることも否定できないだろう。Darnay の死刑を渴望する民衆の冷酷さが、Old Bailey では青蠅、Tribunal では血に飢えた食人種の比喻で示されている。⁽¹⁾ バスチーユからの Dr. Manette の救出という「蘇り」もロンドンでは死体盗掘業という形でもじられる。仏貴族、エブレモンド侯爵が Darnay に爵位継承を拒否される一方、ロンドンの下層階級に属する Cruncher の息子は父のその恐ろしい職業まで継ぐ意欲を持っている。このような「ロンドンの優位」は主要な四人の登場人物、Dr. Manette, Darnay, Lorry, Carton にも当てはまる。事実、この二人のフランス人が祖国を逃れて平穏な家庭の基礎を築くのはロンドンにおいてであるし、再びパリに戻って革命に巻き込まれた後、人事不省となった彼らをイギリスへ救出するのは他の二人である。この Dr. Manette と Darnay を救う Lorry と Carton の結び付きというのは作品の構成の上でも重要な意味を持っているのではないだろうか。それは単に救出のプロットの問題に留まらず、小説を動かす力の点においても言えると思われるのである。⁽²⁾ Lorry が鋭い観察眼、穏健な考え方、想像力で narrator に近い働きをしている点については前論文で述べたが、⁽³⁾ 小説の結末では Carton に主導権が移っているようだ。実際、Carton にはそれに相応しいだけの資

質が具わっている。革命のさ中にフランスへ戻ることへの逡巡と決意を語る内的独白などの例外を除いて存在感の薄い Darnay に比べて Carton は言葉への鋭い感性を働かせて他者との会話において精彩を放つ。それは「〔登場人物が〕対話によって自己を表現するというよりも、物語が彼ら⁽⁴⁾を表現するようにさせるというささやかな仕事を自分に課した」作者、Dickens の意図を裏切ることになるが、彼自ら Preface で ‘I have so far verified what is done and suffered in these pages, as that I have certainly done and suffered it all myself.’⁽⁵⁾ と言っているように、彼が作中人物を「演じ」、それが特に会話の形を取りやすいことも確かである。法廷で読み上げられる Manette の手記は一種の「公開朗読」であるし、Carton に関して言えば、彼の Lucie への愛の告白にはほとんどト書がない。⁽⁶⁾ C. D. という作者とのイニシャルの一致は、それによって Darnay をヒーローとみなす根拠となるより、むしろ、それに隠れて、作者が恋愛中であった E. Ternan の面影を託された Lucie のために犠牲死を遂げる Carton を存分に演じるための手段だったのではないか。それ程、Carton には物語を創り上げる自由な力が与えられている。⁽⁷⁾ Darnay に対する ‘Let us look at his infamous name. D—n the fellow!’ (p. 228) という Stryver の罵りを聞くまでもなく、彼は呪われて (darn) いる、と同時に否定 (nay) されている。この血筋の呪いに縛られて身動きの取れない Darnay を Carton が自分の命と引きかえに救った時、救われた物は Darnay の命だけではなかった。例えば、彼が断頭で Darnay に似た顔を捨てることによって彼を超越したことさえ、彼の仕組みだものの一例にすぎないと思われるのだ。このように、Carton がどのように「意志と靈感」(p. 283) を働かせて物語の結末を仕上げて行ったか、彼の自分自身や言語への純粹さといった隠れた特質に光を当てながら考えてみるのが本論の目的である。

「その時代」(The Period) を表すのに美文 (the period) で始まる物語

が、時代の乱れを言葉への冒瀆で示すように意図されていることは明白である。良くも悪しくも最上級でしか表し得ない——It was the best of times, it was the worst of times (p. 1)——というその時代に与えられた形容の無謀さは、その後に続く、英仏両国の無秩序な政治の反映である。騒々しい最上級の浮き彫りにしているものは唯一確実な「時」の「静かな歩み」('muffled tread') (p. 2) であり、それは栄華を極めた王室の終わりを予告している。

言葉の無軌道と倫理の欠如とを具体的に知るには Darnay が反逆罪に問われる法廷の場から入るのが最適だろう。

Mr. Attorney-General had to inform the jury, that——. That, Virtue, as had been observed by the poets (in many passages which he well knew the jury would have, word for word, at the tips of their tongues; whereat the jury's countenances displayed a guilty consciousness that they knew nothing about the passages), was in a manner contagious; more especially the bright virtue known as patriotism, or love of country. (p. 61)

同義語反復などの悪弊は当然として、ここでは、それを使った弁護士本人に跳ね返る表現として 'at the tips of their tongues' を取り上げたい。これは 'on the tip of one's tongue' (口の先まで出かかって) と 'at the tips of one's fingers' (熟知している) のハイブリッドである。「熟知している」対象が詩行なら「口の先まで出かかって」当然であるから、これ程適切な表現はないし、こう言われた jury を赤面させ、彼らの優位に立つことができる点でも優れている。⁽⁸⁾しかし、結果的に、言葉とは器用な指先でするように、舌によって巧みに操られるものだという彼らの言葉の概念を暴露している。それ故、彼らは無学な Cruncher の目を通して、言葉で服を縫う仕立て屋にされてしまうのである。

Mr. Cruncher had by this time taken quite a lunch of rust off his fingers

in his following of the evidence. He had now to attend while Mr. Stryver fitted the prisoner's case on the fury, like a compact suit of clothes; showing them how the patriot, Barsad, was a hired spy and traitor, an unblushing trafficker in blood, and one of the greatest scoundrels upon earth since accursed Judas—which he certainly did look rather like.

Mr. Stryver then called his few witnesses, and Mr. Cruncher had next to attend while Mr. Attorney-General turned the whole suit of clothes Mr. Stryver had fitted on the jury, inside out; showing how Barsad and Cly were even a hundred times better than he had thought them, and the prisoner a hundred times worse. Lastly, came my Lord himself, turning the suit of clothes, now inside out, now outside in, but on the whole decidedly trimming and shaping them into grave-clothes for the prisoner. (pp. 69-70)

‘best’ でも ‘worst’ でもあるこの時代に相応しく、Barsad と Cly を ‘the greatest scoundrels’ と決めつけたスーツは、彼らを ‘a hundred times better’ な人間とするスーツに容易に裏返すことができる。それを裁判長は入念に鉄を入れて囚人用の経帷子に仕立て上げる。法廷は節度のない言葉の氾濫がそのまま人の生死に結びつく危険な場である。

この衣服のメタファは内容ではなく形としての言葉の側面を明らかにする点で優れている。上の Barsad 達の立場から言っても ‘scoundrel’ と ‘gentleman’ とは一着のスーツの裏表と考えられるからだ。この形骸化した ‘gentleman’ という語は形骸化しているが故に試金石となり得る利点を持った言葉なのではないだろうか。⁽⁹⁾そして Dickens はそのことを最もよく知っていた作家なのである。例えば彼が ‘a perfect gentleman’ (p. 80) という表現を使えば ‘gentleman’ は ‘perfect’ という形容詞によって皮肉られていると考えて良いだろう。

では法廷の場でこの言葉はどのように乱用されているだろうか。名うての悪党 Barsad が「愛国者」(‘the patriot: John Barsad, gentleman, by

name') (p. 62) として Stryver の質疑に応じている。

Never in a debtors' prison?—Come, once again. Never? Yes. How many times? Two or three times. Not five or six? Perhaps. Of what profession? Gentleman. Ever been kicked? Might have been. Frequently? No.—Ever live by cheating at play? Never. Ever live by play? Not more than other gentlemen do. (p. 63)

Barsad に言わせれば、彼は賭博は「他の紳士」並みにしかしていないし、負債者監獄にも数回お世話になっただけの「紳士」なのである。ここで彼は 'prisoner' を裏返しただけの 'gentleman' という服を着ている。「名前」(by name) と「職業」(profession) では 'gentleman' であることがこの言葉の実体の無さの裏付けである。これと逆のことが Darnay に関する Lucie への質問の中で起こっている。

In the midst of a profound stillness, she faintly began:

'When the gentleman came on board—'

'Do you mean the prisoner?' inquired the Judge, knitting his brows.

'Yes, my Lord.'

'Then say the prisoner.' (p. 66)

Lucie は船上で彼女の父に心から 'great gentleness and kindness' (p. 66) を示してくれた Darnay を何の抵抗もなく「紳士」と呼んで訂正される。無実の罪を「着せられた」囚人が「紳士」であることには何の矛盾もないはずだが、Barsad とは逆に、Darnay はどれ程、紳士的な行為をしても飽くまで「囚人」と呼ばれなければならない。

さて、ここに 'gentleman' の仮面を黙認できない人間がいる。Sydney Carton である。だらしなくかつらを被り、両手をポケットに入れたまま天井ばかり見ているこの弁護士も 'the wigged gentleman' と呼ばれる限

りは皮肉を免れないのだが、この ‘gentleman’ という言葉にかけて各々の品位が問われているかのような応答の後で、陪審員が一端引き下がった合い間に彼が初めて Darnay と Lorry に掛けた言葉は彼の倫理観や言葉への鋭い感性を示して興味深い。

Mr. Carton came up at the moment, and touched Mr. Lorry on the arm.

‘How is the young lady?’

‘She is greatly distressed; but her father is comforting her, and she feels the better for being out of court.’

‘I’ll tell the prisoner so. It won’t do for a respectable bank gentleman like you, to be seen speaking to him publicly, you know.’

Mr. Lorry reddened as if he were conscious of having debated the point in his mind, and Mr. Carton made his way to the outside of the bar. The way of court lay in that direction, and Jerry followed him, all eyes, ears, and spikes.

‘Mr. Darnay!’

The prisoner came forward directly.

‘You will naturally be anxious to hear of the witness, Miss Manette. She will do very well. You have seen the worst of her agitation.’

‘I am deeply sorry to have been the cause of it. Could you tell her so for me, with my fervent acknowledgements?’

‘Yes, I could. I will, if you ask it.’ (p. 72)

恐らく Lorry が紳士であることを疑う者はいないだろう。「紛れもない優しさと慎しみ」(‘a genuine tenderness and delicacy’) (p. 184) にかけては並ぶ者のない彼に narrator が忘れずに使う Mr. にはそれなりの意味がある。しかし、この Lorry が赤面したのは、囚人に公然と話しかけては紳士の体面にかかわるという紳士的でない心理を Carton に指摘されたからではないだろうか。‘a respectable bank gentleman’ とはいかにも皮肉な言い回しである。Carton は ‘respectability’ は真の ‘gentleman’ になる障害であり、さらに Lorry について言えば、それは bank によって要求

されたものだということを見抜いている。この Carton の見解がためらいなく受け入れられるのは、Lorry が勤める Tellson's Bank の 'respectability' は 'an active weapon' (p. 49) であるという指摘が既になされているからである。武器として使用可能な 'respectability' の恐ろしさはちようど言葉の経帷子が仕上がる恐怖に似ている。続いて Carton は Darnay に矛先を向け、彼が使った 'could' に言いがかりをつけている。Carton が単にシニカルなだけだと言えばそれまでだが、Lorry に見せた彼の純粋さに照らせば、彼が婉曲の 'could' を許せないのは言葉に対しても潔癖であるからという解釈も成り立つだろう。しかも Darnay に限れば、彼の優柔不断、曖昧さがこの言葉によく出ているとも言えるのだ。Lucie の失神に逸早く気付いた観察眼、Darnay と自分が似ている事に気付いてそれを彼の弁護に利用させた機転に加えて、このような彼の純粋さはこれから注目すべき要素と言えら⁽¹⁰⁾だろう。

Darnay の釈放が決った後、Carton は改めて Lorry に体面の問題を提起する。

'So, Mr. Lorry! Men of business may speak to Mr. Darnay now?'

—
'If you knew what a conflict goes on in the business mind, when the business mind is divided between good-natured impulse and business appearances, you would be amused, Mr. Darnay.'

Mr. Lorry reddened, and said, warmly, 'You have mentioned that before, sir. We men of business, who serve a House, are not our own masters. We have to think of the House more than ourselves.'

'I know, I know,' rejoined Mr. Carton, carelessly. 'Don't be nettled, Mr. Lorry. You are as good as another, I have no doubt: better, I dare say.'

'And indeed, sir,' pursued Mr. Lorry, not minding him, 'I really don't know what you have to do with the matter. If you'll excuse me, as very much your elder, for saying so, I really don't know that it is your business.'

'Business! Bless you, *I have no business,*' said Mr. Carton.

'It is a pity you have not, sir.'

'I think so, too.'

'If you had,' pursued Mr. Lorry, 'perhaps you would attend to it.'

'Lord love you, no!—I shouldn't,' said Mr. Carton.

'Well, sir!' cried Mr. Lorry, thoroughly heated by his indifference, 'business is a very good thing, and a very respectable thing. And, sir, if business imposes its restraints and its silences and impediments, Mr. Darnay as a young gentleman of generosity knows how to make allowance for that circumstances. Mr. Darnay, good-night, God bless you, sir! I hope you have been this day preserved for a prosperous and happy life. —Chair there!'

Perhaps a little angry with himself, as well as with the barrister, Mr. Lorry bustled into the chair, and was carried off to Tellson's. (pp. 76-77)

もちろんここで使われている 'the business mind' は 'Mr. Lorry's mind', 'the mind of a man of business' とは微妙に意味合いが異っている。仕事が求める体裁と善良な衝動の間で揺れた「実務家」の心は最後に体裁に傾いた。それを知っている Carton は何にも優先する Lorry にとっての仕事に皮肉を込めて、この 'business' という言葉を人間 'Mr. Lorry' の代わりに、しかも修飾すべきものより「優先的に」置く巧みな表現を考えついた。実際、これは同様の意味合いを持たせて narrator が徹底的に Lorry に対して用いる表現法である。⁽¹¹⁾ さらに、'business appearances' という並べ方は 'impulse' と 'appearances' の対照を 'good-natured' と 'business' との関係に適応させることをも可能にしている。そこで仕事第一主義の Lorry が今回に限り 'business' を「仕事」という意味以外で使ってしまう。すると Carton は '*I have no business.*'⁽¹²⁾ と言ってこの語を両義に使い、Lorry に 'business' を本来の意味へ戻すチャンスを与えている。ところが Lorry の 'business' の説明は明らかな失敗である。'best' のいかがわしさを知っている我々が 'good' を信用す

るはずもなく、まして ‘respectable’ については既に述べた通りである。彼は正直な Carton を前にして、至上の ‘business’ を擁護し切れない。さらに、その仕事への忠誠が先程、法廷で彼に取らせた紳士的でない行動への弁解が、彼に形骸化した ‘gentleman’ を使わせているのは二重に皮肉である。なぜなら ‘generosity’ のない ‘gentleman’ はいないからである。彼自身にも、先の行為がそれ程、他人の寛大さを必要とする疾しいものと思われて来たのだろうか。ずっと年の離れた若者から価値観の潔癖さを問われた Lorry が「自分自身に腹を立てる」のも無理はないのである。しかし、「体面」に囚われた彼は、だらしない「外見」をした Carton が紳士的に Lucie を助け、Darnay の命を救う「仕事」をしたことに思い至ってはいない。

Carton は以後、Lucie への恋に苦しむことになるが、この問題には Darnay と Stryer という彼と全く同世代の男性が関わってくる。二人とも彼に、忘れていたはずの彼本来の姿を意識させずにおかないからである。彼の過去を掘り起こすものとして、次に Carton の立場から彼らとの関係を取り上げたい。

実は、Lucie を知った直後、Carton が Darnay と、続いて Stryer と交す会話が連続していることは、後の Darnay の Manette に対する Lucie への愛の告白と、Stryer の Carton 相手の同じ告白とが連続している（これは「双幅の絵」と呼ばれている）ことと同様、決して偶然ではないのである。

Darnay にとって Carton が自分に似ていることにほとんど意味がない一方、Carton にとってそれは重大な意味を持っている。なぜなら Darnay は彼に「墮落する前の、そうだったかもしれない自分の姿」(“what [I have] fallen away from, and what [I] might have been” (p. 79)) を見せつけるからである。そのため Carton は自分の ‘counterpart’ としての Darnay に向ってほとんど一方的に話をする。それは恰も自分自身に毒づ

いているようだ。釈放されたばかりの Darnay が時と場所の感覚が定まらず半ば放心状態であることは当然としても、Canton に対し Darnay が終始、精彩を欠くのは、逆に Darnay を前にした時、Canton の自我が最も強く呼び覚まされ、相手を圧倒してしまうからである。彼は酒に溺れて墮落しきった生活を送っている理由を次のように告白する。‘I am a disappointed drudge, sir, I care for no man on earth, and no man on earth cares for me.’ (p. 79) この愛の飢餓感の告白を引き出したのは、恐らく彼の内部で起こった Lucie の憐れみへの切望だっただろう。「あんな同情と憐れみの対象になるってことは、死罪に問われても構わないってものかい」(‘Is it worth being tried for one’s life, to be the object of such sympathy and compassion, Mr. Darnay?’ (p. 78)) と Darnay をからかった時、内心、彼は死罪に問われて「いたかもしれない」自分とその自分に同情を寄せて「いたかもしれない」Lucie を念頭に置いていたはずである。この時、彼の中には「紙箱」(‘carton’)¹³⁾のように軽い命と引きかえに Lucie の同情を勝ち取るというテーマが見えて来たのではないだろうか。実際、彼が Stryver に、自分と Darnay が似ていることを利用させるメモを送った時、次には彼自身の身に死罪の危険が降りかかる可能性さえあったのである。それにもかかわらず彼は「自由意志で」(‘of his own free will’ (p. 78)) その行動に出た。その時既に彼は無意識的に彼女の憐れみを勝ち取る行動に出ていたのかもしれないのだ。ただ、確かに彼は「そうだったかもしれない」自分の命を救わずにはいられなかったとは言えるだろう。彼の中で無駄に費された自分の過去への愛惜は完全に消え去ってはいない。今後、この人生を「そうだったかもしれない」もので終わらせないというテーマが Lucie の憐れみのテーマと並行する。Darnay は現実の自分との差を見せつける点では嫌悪すべき男であるが、過去への愛惜を起こさせる点では憎むことができない存在なのである。

一端、Darnay に失われた過去を喚起されたとなると、Stryver とのライオンとジャッカルのような屈辱的關係においても、隠れた意味が表出せ

ざる得ない。そのために意図的にこの二人の会話は Darnay との会話の直後に置かれている。Stryver はこの同じ晩、不機嫌な Carton を見て、やはり気分屋だった ‘the old seesaw Sidney’ の思い出をきっかけに、彼の「過去と現在を振り返り」(‘reviewed him in the present and the past’ (p. 83)) 始める。実は、彼は名門パブリックスクール、パリでの法学生時代を通じて唯一人 Carton の実際の過去を知っていて、デリカシーに欠けたやり方で昔の事を持ち出して彼を苦しめるのだ。とすれば Stryver が Carton につけた ‘Memory’ という渾名は皮肉な名だ。⁽¹⁴⁾ 彼は「思い出」を共有する幼馴染みという意味で使っているのだろうが、Carton にしてみれば特に Stryver との関係において蘇せたいような「思い出」はないからだ。さらに言えば、Stryver は「そうだったかもしれない」過去を知っている人間どころか、彼がいなければ「そうになっていただろう」人間である。Carton は常に押しの強い Stryver の陰に隠れて頭角を現すチャンスを失い、その関係が今なお続いているからだ。Stryver は旧友とは言え、金と酒を餌に自分の仕事を肩代わりさせることで Carton をどんどん破滅へと追い込む言わば悪魔だ。彼を Carton に巣くった悪魔とすれば、Darnay とは別の意味で彼の Double という見方ができる。⁽¹⁵⁾ Darnay が彼に架空の姿を見せた一方、Stryver は揺がぬ実際の過去と現実を突きつけてそれを否定する。この悪魔は Carton が Darnay と自分を同一視したことを知っているかのように彼に法廷での ‘identification’ (p. 81) の説明を求める。この言葉は単に「顔が似ているとすること」の意味に留まらない。Carton 自身、次のように説明している。「もし運が良ければ、僕もよく似た奴になっていただろうと思ったのさ。」(‘I thought I should have been much the same sort of fellow, if I had had any luck.’ (p. 82)) ところが Stryver はこの仮定を ‘You and your luck!’ と言って完全に否定してしまうのである。彼はさらに、思い出話からその日初めて見た Lucie に話題を移して彼を苦しめて行く。それ故、Carton は Darnay に対し時と全く異なる Lucie 評をすることになる。先程、彼女が ‘a fair young lady’

(p. 78)であることを認めていたにもかかわらず、彼はここで彼女を ‘a golden-haired doll’ (p. 84) と呼んでその美しさを完全に否定しにかかる。それは彼の Lucie への強い諦めの反映にすぎない。Stryver が見せつける救いようのない自分自身に対して、彼は彼女への望みを完全に否定しない訳には行かない。

さて、これで結婚の意志を描いた「双幅の絵」(A Companion Picture)の意味もより明確になるのではないだろうか。Carton と以上のような関係にある Darnay と Stryever はやがて、各々 Lucie 本人にではなく前者は彼女の父に、後者は Carton に、またしてもある同じ晩、彼女との結婚の願望を表明するのである。もちろんこの二枚の絵は相前後して並べられている。

Darnay の告白は彼と医師との過去から未来へつながる暗雲を予感させる以外にも彼自身の性格への不安をかき立てる。それは彼に「認識」の表現の繰り返しが多いためである。彼は医師と娘の愛がどれ程深く、特殊なものであるか知っている事を、一回のせりふの中でさえ ‘I know...’ を六度まで(二度の ‘how can I fail to know’ を除いて)繰り返し述べ、最後に ‘I have known this, night and day, since I have known you in your home.’ (p. 126) と締めくくる。この ‘I know’ の反復が不安を抱かせるのは、それが ‘an effort—to keep the mind moving against distraction and breakdown’⁽¹⁶⁾ を示すからである。そしてこの彼の習慣は、フランスに帰る直前の、事態をなおざりにしてきた事への反省と自己弁護、一端、帰国してからの想像を超えた現実の認識においても見られる。とりわけ前者の場合、‘[his] own’ (p. 230) の繰り返しも加わって、自己弁護を自己陶醉へと変えるはずみになっている。彼が「自分の意志で」(‘of my own will’) (p. 236) 祖国へ戻ったことを民衆に訴えても、返って来たのは “His cursed life is not his own!” (p. 238) という「彼自身のもの」でないばかりか「呪われた」命の現実である。彼の ‘I know’ は客観的には ‘ignorant hope’ (p. 241) にすぎない。つまり、この医師への告白の時の ‘I know’

も、いかに彼が Manette 父娘の愛を知り尊重しているつもりでも、呪われた自分自身の出自と医師との関係を全く知らない限り、「無知な希望」でしかないのである。

この「知る」ことに執着する Darnay と Carton との対照性が Lucie をはさんで鮮明に浮び上がる場面が小説の早くにあった。仏革命を予示する足音の筈の幻想を彼女が彼らに語るところである。

‘Is it not impressive, Mr. Darnay?’ asked Lucie. ‘Sometimes, I have sat here of an evening, until I have facied—but even the shade of a foolish fancy makes me shudder to-night, when all is so black and solemn—’

‘Let us shudder too. We may know what it is.’

—
‘Are all these footsteps destined to come to all of us, Miss Manette, or are we to divide them among us?’

‘I don’t know, Mr. Darnay; I told you it was a foolish fancy, but you asked for it. When I have yielded myself to it, I have been alone, and then I have imagined them the foot-steps of the people who are to come into my life, and my father’s.’

‘I take them into mine!’ said Carton. ‘I ask no questions and make no stipulations. There is a great crowd bearing down upon us, Miss Manette, and I see them—by the Lightning.’ He added the last words, after there had been a vivid flash which had shown him lounging in the window.

‘And I hear them!’ he added again, after a peal of thunder. ‘Here they come, fast, fierce, and furious!’

It was the rush and roar of rain that he typified, and it stopped him, for no voice could be heard in it. A memorable storm of thunder and lightning broke with that sweep of water, and there was not a moment’s interval in crash, and fire, and rain, until after the moon rose at midnight. (pp. 96-97)

Darnay は彼女の「ほんのつまらない空想」の正体を「知ろう」とする。「その足音は僕達全員に来る運命なのですか、それとも僕達の間で分けることになるのですか」という、彼の要領を得ない質問に、‘I don’t know’ と答えた Lucie は皮肉にも彼の ‘know’ の価値感を否定したことになる。それを支持するかのよう⁽¹⁷⁾に Carton は「僕なら質問などしないで、全てを僕の人生に引き受ける」と Darnay との違いを強調している。彼には、実体を知らなくても Lucie の恐怖を自分の身に引き受ける用意がある。この対比をさらに裏付けることに、彼は Darnay の「認識」に対して「直感」を表す ‘I see’, ‘I hear’ を用いている。そしてこれこそ彼が最期のビジョン⁽¹⁸⁾で用いることになる形式なのである。

Stryver の Carton への告白は、それが Darnay の純愛に対して極めて俗物的な結婚観を示しているということ以上に、Carton がいかに Lucie に値しない人間であるか、彼自身認識している事実を改めて彼に言うという意味において重要である。Carton は Lucie が遠からず誰かの妻になり、それが自分ではあり得ない事実⁽¹⁹⁾に駆り立てられるかのように、やがて彼女の前に傷ついた心をさらけ出しに行くからだ。前の二つの告白とは違って、Carton のこの告白は自分の傷を Lucie に目の当りにさせることによって記憶させるという「直感」的な彼らしい方法でしか、なし得ない性質のものであるが故に、作者は彼にだけ直接の告白の場を与え、しかも既に指摘したように、ほとんど narrator の介入を許していない。

彼は死んでいたはずの夢、悔恨、気力が、結局無駄だったとしながらも、彼女によって「息を吹き返された」(‘inspired’ (p. 144)) ことを告白する。そして彼の願いは、この告白が彼女の胸にだけ優しく刻まれることにあり、それが翻って終生自分の唯一の良い思い出となることである。しかし、彼は自分の苦悩がただ単に彼女の胸に刻まれることに飽きたりず、自分が彼女と彼女の愛する命のためなら、いつでも犠牲になる情熱と誠意を持っていることを告げる。これは自ら彼女にとって「良い思い出」となるテーマだと言えないだろうか。「彼女の憐れみと引きかえに命を捨てる」短絡的

テーマは自らが口にした記憶の相互作用、即ち彼女への告白によって得られた「良い思い出」にかけて自らが「命を失うことによって良い思い出になる」テーマに前進した。そしてこのテーマは必然的に過去の清算の問題も包含している。

このテーマがあるからこそ、Darnay と Lucie の結婚後、初めて Carton が現れた時、彼の Darnay への「嘆願」が ‘I wish you would forget [it].’ (p. 196) ということなのである。今では彼の心は未来を目指し、過去をできる限り白紙に戻したいと思っている。そのためチャンスが訪れるまでの「今」は年に数回訪ねたいが、家具のように無視してほしい、ということなのである。彼は過去だけでなく今の自分をできるだけ記憶されない存在にしようとしている。

この家具の比喻は Carton の「構想」という点でも面白いが、Lorry との関連においても注目に価する。実は Carton が家具とみなされたいという「嘆願」を行うこの ‘A Plea’ と題された章は、Lorry が Dr. Manette の「意見」を求めて彼の靴作りのベンチ、その他を破壊してしまう ‘An Opinion’ という章の次に置かれている。題自体の類似性から見ても、これらがやはり「双幅の絵」となっていると判断できそうだ。題と内容の関係についても、「嘆願」が Carton の Darnay に対するものであると同時に、引き続き Lucie が夫に行う、Carton にもっと思いやりを持ってほしいという「嘆願」であるように、前章の「意見」とは医師の「意見」であると同時に、或いはそれ以上に、Lorry の「意見」であった。即ち、ベンチ、道具類は Manette の辛い過去を蘇らせ、彼を茫然自失に陥らせる危険があるので捨てるべきだという意見である。しかし、医師自身その関連性を否定しているように、Lorry の意見は、結局、実行に移されはしたが、ほとんど正当な根拠がない。Manette の監禁時代の単調な日々を救った言わば命の恩人として、彼の部屋の片隅にひっそりと置かれていたベンチに、もし言葉を発することができたら、自分を「殺害」しようとする Lorry に向って、Carton が、彼を命の恩人と思っている Darnay に言っ

たとおりにこう言ったのではないだろうか。「役にも立たず、見栄えもしない家具だが、昔のよしみで無視してほしい」(‘I might be regarded as an useless, an unornamental peice of furniture, tolerated for its old service, and taken no notice of’ (p. 197)) と。これは一点の家具を挟んで、Lorry の妄想的なベンチ「殺害」という、Manette の過去への愛惜を無視した行為に対する Carton の批判としても対になった絵なのである。

このように新たに出来た家庭の枠組みが一端、落ち着いたかに見えた頃、イギリスにも仏革命の波が押し寄せる。Darnay も不幸な祖国を見捨てて安閑としていられなくなった矢先、彼は Lorry に見せられた一通の手紙によって帰国の決意を固める。Manette を「発掘」して物語を始めた Lorry は元侯爵宛の臣下の嘆願の手紙を本人と知らずに Darnay の手に渡してしまうことで次の展開を引き起こしたことになる。彼はその手紙を見なければ、良心の苛責や誹謗にもかかわらず、帰国を実行するに至らなかったかもしれないからだ。Lorry が手渡した手紙が Darnay をパリへ呼び寄せ、それと共に Dr. Manette, Lucie, さらに Carton にも海を渡らせることになる。このプロットの展開は登場人物の機能にも変化をもたらす。それはとりわけ、それまで narrator に近い役割りを果していた Lorry に起こって来るようだ。災いの展開をもたらした事は舞台をパリに移すことを意味し、それは急速に彼を無力にして行く。そしてその過程は彼の呼称に端的に現れているようだ。これから主にこの点から彼と他の人物、特に Carton との力関係の変化を見て行きたい。

Lorry はフランスに渡って間もなく Darnay を追って来た Lucie 達の来訪を受け、Darnay が既にこの地で投獄されていることを聞いて驚愕する。ここで narrator は ‘The old man uttered an irrepressible cry’ (p. 247) と彼を「老人」と呼び、続いて ‘The old man kissed [her], and hurried [her] into his room.’ (p. 248) と再び同じ表現を使っている。これまで Lorry 自身が自分のことを ‘an old fellow’ (p. 138) と呼んだのと、

他に一度、Darnay が、優柔不断な自分との比較で ‘the brave old gentleman’ (p. 231) と呼んだことはあったが、narrator がこのような表現を用いたことはなかったと思われる。渡仏して間もなく連続的にこの呼び方が現れたことは、Lorry の立場の悪さと narrator にとっての彼の位置付けの揺らぎを示しているのではないだろうか。

narrator にとっての Lorry の位置付けという点では、彼に執拗に用いられてきた ‘business’ という言葉にも注目する必要があるだろう。この言葉は彼個人にとっても、小説との関係においてもほとんど呪い^{まじな}のような力を発揮して来た。例えば、彼が Lucie 達の仮の住まいを探そうと思い立った朝、彼の冷静な判断力は銀行への使命感と彼女達への愛情との間で十分に機能している。それは次の引用中の ‘business’ という言葉の多さからも推し量られる。

One of the first considerations which arose in the business mind of Mr. Lorry when business hours came round, was this:—that he had no right to imperil Tellson's by sheltering the wife of an emigrant prisoner under the Bank roof. His own possessions, safety, life, he would have hazarded for Lucie and her child, without a moment's demur; but the great trust he held was not his own, and as to that business charge he was a strict man of business. (p. 251)

しかし、皮肉にもこれを最後、この宿へ Defarge 夫妻を案内した時から、彼からこの呪い^{まじな}の言葉が消えてしまう。彼は実体の分らない M⁽¹⁹⁾me. Defarge の影が Lucie 母子を覆うのを見て、その恐怖を ‘the business mind’ ではなく ‘his secret mind’ (p. 255) で感じてしまう。Lucie を力付けようにも彼自身の不安さえ抑えることができない。実はこの時より三年前、バスチーユ陥落の時に、Manette の手記を手に入れていた M⁽¹⁹⁾me. Dafarge は Darnay はもとより彼の妻子まで弾劾の対象として考えていた。彼女の怨念と医師自身の弾劾という実体を持つその影が Lucie 達に

かかった時、Lorry はおろかもはや誰にも彼女達を守る力はない。

この時、Mme. Defarge は Lorry から ‘business’ という言葉を奪い取ったかのように Lucie に向かって次のように言う。‘Your husband is not my business here. It is the daughter of your father who is my business here.’ (p. 254) ‘business’ は彼女の口に移った時から、今後の Lucie の行動を知るために、即ち決して彼女を逃さないために、その顔を覚えるという恐ろしい「用事」に変えられてしまう。その後、この言葉は木挽き (p. 262, 3) や Tribunal (p. 270) においても同様の不吉な用いられ方しかせず、最後に M. Defarge の ‘[my] business’ (p. 302) も医師の手記の有効性を揺がぬものにするために彼の筆跡を調べることだったと証言される。この国では革命の「本気」(‘business-meaning’) (p. 300) という致命的で残酷な伝染病の病毒を免れている者はいない。

‘the old man’ の出現に続く ‘business’ の脱落と併せて、Lorry の機能の衰退という点では次の記述についても考えてみたい。‘And when Jarvis Lorry saw the kindred eyes, the resolute face, the calm strong look and bearing of [Dr. Manette],—he believed.’ (pp. 257-8) これは視点が Lorry にある点では以前と変わらないが、彼から初めて Mr. が落ちた箇所なのである。⁽²⁰⁾そしてそのことは彼が見ている対象が Dr. Manette であることと無関係ではない。かつてバスチーユの囚人だったという事実によって特殊な立場と力を与えられた医師に対して、Darnay 救出に関しては何もすることができない Lorry は、イギリスにいた時と逆に「弱者」(p. 258) の立場に回ってしまった。しかしこの両者の立場の逆転以上に問題なのは、Lorry の目が捕えたこの医師の力強さが仮の姿にすぎなかったということである。既に述べた通り、この時彼にはもはや最終的に Darnay を救う力はなかったはずだ。登場人物としての力の衰弱とともに、このような見る目の狂いが narrator に Lorry から Mr. を落とさせたとも考えられるのである。

Lorry の呼称の変化で考えられるもう一つの状況は、彼が見る側ではな

く見られる側に回った時、さらに言えば、若者に視点が置かれた時、或いは彼が若者との比較で捕えられた時ではないだろうか。Darnay の視点における ‘the brave old gentleman’ について前述したように、彼はその義務感、忠誠心において若者がそれに倣い、さらに超えたいと思うような人物であり、その意味で ‘old’ は必ずしも否定的な語とは言えない。若者からの敬意を暗示するかのように、これとよく似た ‘the staunch old gentleman’ (p. 266) という表現が次に用いられるのは、読者にも他の登場人物にも明かされないが、Carton が彼らを追って Lorry の事務所に訪ねて来た時である。それ以後、これに類した呼称は彼と Carton との対話の場面で繰り返されることになる。

実際に姿を現した時、Carton は既に逸早く手に入れた Darnay 再逮捕の情報から彼に死刑判決が下されることを想定し、Lucie に誓った犠牲のチャンスをもにするための筋書きを考えていた。‘a braced purpose, a kind inspiration’ (p. 283) が彼に宿っていることは Miss Pross が肌で感じている通りである。‘no business’ をむしろ自慢にしていた彼だが、今は「心に抱いた秘策」(‘such a business as he had in his secret mind’ (p. 283)) がある。「神秘性」を強調されてきた Carton の ‘his secret mind’ は Lorry の場合とは逆に彼の本領が発揮される土壌である。そしてここで暖められた ‘business’ は Lorry のそれに代わって、Defarge 達の ‘business’ と対決すべきものなのである。次に上げるのは Carton の真意を知らずに Darnay 再逮捕の絶望に打ちひしがれる Lorry と彼との対話の場面である。

Mr. Lorry's eyes gradually sought the fire; his sympathy with his darling, and the heavy disappointment of this second arrest, gradually weakened them; he was an old man now, overborne with anxiety of late, and his tears fell.

‘You are a good man and a true friend,’ said Carton, in an altered

voice. 'Forgive me if I notice that you are affected. I could not see my father weep, and sit by, careless. And I could not respect your sorrow more, if you were my father. You are free from that misfortune, however.'

Though he said the last words, with a slip into his usual manner, there was a true feeling and respect both in his tone and in his touch, that Mr. Lorry, who had never seen the better side of him, was wholly unprepared for. He gave him his hand, and Carton gently pressed it. (p. 293)

'he was an old man now' とは Lorry 自身の嘆息とも narrator からの冷静な評価とも取れるが、そこには明らかにこの老人を見つめる Carton の目と、涙という Lorry の無力の証を見てしまったことを詫げる彼の紳士の配慮がある。Carton の「真実の感情と敬意」に触れて初めて Lorry は彼の良い面に気付き、二人の間には親子以上の共感が生まれている。

このシーン以外に Lorry に 'old' という形容が使われるのは、最後の逃亡の場 (p. 339) を除いて、全て何らかの形で Carton と関わりのある状況の下である。具体的に見ると、まず明らかに Carton に視点がある彼の 'surmise' (p. 299) と最期のビジョン (p. 358) の中で 'the good old man' と呼ばれている。次に Canton と接している場合の地の文では 'the old gentleman' (p. 284, p. 294, p. 324), 'the old man' (p. 328) と呼ばれ、このうち 'At the appointed hour, [Canton] emerged from [it] to present himself in Mr. Lorry's room again, where he found the old gentleman walking to and fro in restless anxiety.' (p. 324) では視点は Carton にあると考えて良いだろう。Carton の出現と共に彼との関わりの中で用いられるこのような呼称は、視点の移動と共に、物語を動かす力も若者の手に移って行ったことを跡づけているのではないだろうか。

Lorry が Carton と Barsad の密談から除外されシナリオ作成に加えられなかったり、同じ場に居合わせながら、もはやカートンに現れた変化を読者に伝える目ではなくなった——'if there had been any eyes to notice

the influence of [her] look, on Sydney Carton, ……」(p. 300) — 一方、このように narrator 自身 Carton には断定を避け仮定法を多用して彼の ‘inscrutability’ (p. 287) を尊重するように、Carton は次々、微妙な誤解の余地を持った巧みな表現を編み出して行く。ただし、この欺きは人々への配慮から起こったものであるばかりか、その言葉は彼の決意を正直に表明してもいるのだ。例えば、彼が ‘Enough of me’ (p. 296) と言った時、それを「僕のことはよしませう」の意に取った Lorry は「私のことも」と言って話題を変えたが、この言葉は一方で「僕はもうたくさん」という死の決意に取ることが可能だ。或いは、‘Of little worth as life is when we misuse it, it is worth that effort. It would cost nothing to lay down if it were not.’ (p. 319) と言った時、Carton はこの一見、一般論と思われる言葉を「まして Darney の命なら…」という意に受け取らせておいて、実は最期のビジョンで語られる通り「自分の命を捨てる」(‘lay down my life’ (p. 357) という彼個人の決意を Lorry の前で述べている。この会話では以下全て彼の命は Darnay の命のことだと聞かれるように仕組まれている。しかしそれらは彼の死によって正しく解釈され直す運命にあるし、このシナリオ自体、「彼の死後」、Lucie が「彼の命」が無駄に捨てられたと悔まない処置だと説明さえしている。彼の描くシナリオは彼の死が結末ではない。

表面的には欺くことになっても Lorry は Carton にとって、なくてはならない存在である。精神的な面から言えば、死を間近に控えた Carton は、やはり死が近い Lorry から死について聞かずにはいられない。彼にとっては Lorry が ‘old’ であることに意義がある。彼が Lorry に感じた父親に対する以上の敬意の裏には二人に共通した「死」のテーマがあったのではないだろうか。Carton は正面からこの問題を取り上げて言う。‘See what a place you fill at seventy-eight. How many people will miss you when you leave it empty!’ (p 295) これに対する、誰も泣く人はいないだろうという Lorry の答えを彼は聞き過ごすことができない。

彼の真剣な反発に、Lorry も ‘I didn't quite mean what I said.’ と非を認めざるを得ないが、そこには、かつて Carton に反発した面影はない。一方、相変わらずの Carton の潔癖は「自分の孤独な心に、真実をもって語る」(‘if you could say, with truth, to your own solitary heart——’) ことを Lorry に求めている。そしてここで彼が使う ‘you’ は彼自身のことでもあるのだ。

Carton が Lorry から確証を得ようとしていることは、人々の記憶に残るような何か良い事をしたことがなければ、その人の生きた年月はその数だけの呪い^{のろい}でしかないのか、ということである。Carton は Lorry の同意を得て、記憶されることによって人生を呪いのままで終わらせない決意を固める。さらに彼は、死が近づく程、幼い頃の記憶が蘇り、それはそれだけ良いことなのだと Lorry と確かめ合う。即ち、彼は死を、記憶されることと記憶を蘇らせることとして、捕えようとしている。彼は生きながら死んだ日々を送るのではなく、死ぬことによって人々の中に生きを考える。そして恐らくこれが彼が繰り返す聖句——‘I am the resurrection and the life, ...’——の彼の解釈なのではないだろうか。記憶は生き⁽²²⁾ている死であり、それが永遠というものだろう。

記憶、或いは生の中の死の捕え方は Carton に、明日には自分の命を奪う人々が束の間眠る町の「生と死、全体」を「敬虔な関心」を寄せて捕える広大な視野を与えている。

With a solemn interest in the lighted windows where the people were going to rest, forgetful through a few calm hours of the horrors surrounding them; in the towers of the churches, where no prayers were said, for the popular revulsion had even travelled that length of self-destruction from years of priestly impostors, plunderers, and profligates; in the distant burial-places, reserved, as they wrote upon the gates, for Eternal Sleep; in the abounding gaols; and in the streets along which the sixties rolled to a death which had become so common and material, that no sorrowful story

of a haunting Spirit ever arose among the people out of all the working of the Guillotine; with a solemn interest in the whole life and death of the city setting down to its short nightly pause in fury; Sydney Carton crossed the Seine again for the lighter streets. (p. 298)

Carton は死んだ父母の記憶を蘇らせ、老いた Lorry に敬意を払ううち、やがて ‘Creation’ (p. 299) に興味を抱く。それは今までの彼の人生の ‘indifference’ の呪いを自ら解く姿勢である。しかし、この無関心の呪いは彼だけに向けられたものだっただろうか。彼の死は彼自身の過去と仏革命の災いを清算して始めて意味があるはずである。即ち、彼はこの「軽度な関心」によって、貴族一般の ‘heartless indifference’ (p. 329) を、エブレモンド侯爵の ‘negligent indifference’ (p. 309) を克服した。自らの無関心で「石化」した侯爵と対照的に、この時の彼はセーヌの川辺を歩き、流れに呑み込まれて海へ運ばれる小さな渦に自分を重ね、その自分を消し去る流れを ‘a congenial friend’ (p. 299) と感じて一体化を果している。これは「永遠に凍りついて閉じられる水」(‘the water——locked in an eternal frost’ (p. 10)) で終る自分を力強く深い流れに変えた瞬間と言うこともできるだろう。⁽²³⁾

彼はこのように貴族に向けられた呪いを解くことによって小説を終わらせなければならない。そしてこの呪いは遺族に敵対するはずの民衆にもかけられている。彼らは迫害する対象に「人間的な共感のひとかけらも」(‘not a touch of human sympathy’ (p. 316)) 持ち合わせなくなったために、彼らと同じ轍を踏んでいるからだ。⁽²⁴⁾

Carton は、セーヌに架かる橋上に佇んだ時、輝かしい日の出が、繰り返し唱えた聖句を、長く明るい光線として胸に暖かく「打ち込む」(‘strike’ (p. 299)) のを感じる。それはあたかも、自ら木挽きと Mme. Defarge を「打ち殺す」(‘strike the life out of [him]’ (p. 297), ‘strike under [her] arm sharp and deep’ (p. 324)) 衝動を押さえて自己犠牲に徹

しようとする彼のみが受けることを許された天の抱擁のようだ。⁽²⁵⁾この暖か
い一撃は小作農の少年が侯爵から受けた胸への致命傷と、その報いでもある
かのように彼が Gaspard によって胸に突き刺されたナイフの呪いを解
いたことにならないだろうか。

このように考えると、Carton が川辺で太陽に抱かれて取る睡眠や処刑
の前夜の「熟睡」(‘fell sound asleep’ (p. 321)) の意味するところは明白で
あろう。それはちょうど同じ頃、夢や妄想にかき乱されている Darnay
の眠りばかりか、かつての彼自身の眠りを知らない放蕩の日々、熱病患者
のように睡眠を奪われたこの国の人々、小作農の眠りの犠牲の上に成立し
ていた貴族の眠りの災いを全て払う健全な眠りである。

Carton は、誰にも動かせない障壁として立ちのびだかった Manette の手
記の脅威を、そこに記された、革命の発端となる貴族と平民の関係の縮図
とも言える侯爵家と小作農一家にまつわる呪いを払うことによって、かな
り克服していると言えるのではないだろうか。思えば、この手記は医師が
呪いのために十年前の出来事を鮮明に「思い出」して記したものであり、
記憶が最も恐ろしい目的に使われた例である。彼にとって記憶は侯爵家弾
劾と自分の理性の確認の手段でしかない。Carton はこの貧しい記憶のあ
り方も、先に見た死を生の中で捕えさせる記憶のあり方によって克服して
いるのである。手記の性質、内容共にある程度克服されたとすれば Lucie
にかかった影の実体も脆いものになるだろう。しかしここで動かし難いの
は Mme. Defarge の存在である。医師の手記の恐ろしさは、Darnay を
弾劾しているのが彼の義父自身であるということと同時に、侯爵に殺され
た少年の妹こそ Mme. Defarge であったということである。そのため、
彼女は Lucie 母子まで殺しても構わないと思っている。しかし、法廷の
場に関する限り、この事は公表されず、それは Carton だけが知り得た事
実である。彼は Darnay に似たイギリス人がいることを周知の事実とす
るために彼らの店に行き、この情報を得ることができた。そこで彼は表現
できない程の「彼女の追撃の執念深さ」(‘the inveteracy of her pursuit’

(p. 327)) を知る。この知識があったからこそ彼は一刻の猶予もなく、Lucie 達を国外に脱出させることを Lorry に依頼できたのである。

最後まで緻密な計画を練り、全てを Lorry に委ねた Carton は Lorry の精気を蘇らせて行く。‘His manner was so fervent and inspiring, that Mr. Lorry caught the flame, and was as quick as youth’ (p. 327) Lucie に ‘inspire’ され、「燃え上がらせられた」(‘[you] kindled [me]—into fire’ (p. 144)) Carton の炎は空しく消え去ることなく Lorry に燃え移った。二人の会話のほとんど最後で Lorry は Carton に対する信頼を次のように表現している。‘Why then, it does not all depend on one old man, but I shall have a young and ardent man at my side.’ (p. 328) しかし、二人は同じ使命感で結ばれているとは言え、その筋書きは全て Carton の心中にあり、自分の隣に座って脱出する若者が Carton ではないことを Lorry は知らない。⁽²⁶⁾

Carton が Lorry に依頼した筋書きの最後は ‘The moment I come to you, take me in, and drive away’ (p. 328) ということであった。事実上、Mme. Defarge の「追撃」と彼らの「逃走」、或いは Carton のその願いとが対決することになる。追跡を恐れながら逃げる Lucie と彼女達の家へ向う (‘pursuing her way’ (pp. 346-7)) Mme. Defarge の描写が前後して劇的な緊張を生むが、Mme. Defarge の追跡の前に彼らの逃亡が描かれ、しかもそれは時間的には数時間後のことであることから、彼女の敗北は明らかである。呪った相手と、その呪いの故に、自らを同一にしてしまったことが彼女を敗北に導かずにはおかない。「洗練された虎」(‘a refined tiger’ (p. 119)) のような侯爵への憎しみが彼女を ‘tigress’ (p. 344) に変えた。「あなたが誰よりも恐ろしい。」と言った Lucie の言葉を ‘a compliment’ (p. 254) と受け取った彼女に、かつて、「恐怖と隷属の暗い尊敬のまなざしを僕に向けない者はいない。」という Darnay の悲しみに “A compliment to the grandeur of the family” (p. 116) と答えた彼の叔父の姿を重ねない者はいない。これで Carton が Manette の手記に記された

侯爵の呪いを清算した時、Mme. Defarge の呪いも同時に無効にされていたことが分る。彼の勝利は、二人の死がほとんど同時でありながら、彼女が死んだ時には、車で運ばれる彼に微笑が浮かんでいたことで示されているのではないだろうか。それは囚人となることによって真の紳士となった者の微笑であり、いかなる残虐性をもってしても消し去ることができないものだ。

彼が再び Barsad に託した ‘drive away!’ (p. 335) という願いは最後に、この小説に付いて回った ‘drive’ の怨念を払ったと言えるだろう。「疾走する」(‘driven very fast’ (p. 303)) 馬車で拉致される所から始まる Manette の手記のドラマは何を物語っていたのだろうか。「酷使」(‘drive [us]’ (p. 309)) された百姓と、馬車によって「生きながら墓場へ連れて来られた」(‘brought to [my] living grave’ (p. 315)) 医師の侯爵家への怨念が、二十数年後、疾走する彼の馬車に子供を轢き殺された Gaspard によって、‘Drive him fast to his tomb’ (p. 122) という言葉と共に侯爵の「胸に突き刺された」(‘Driven home into the heart’) 一本のナイフに込められていたということではなかったか。さらにこの殺人罪によって Gaspard が “bring him fast to his tomb” (p. 161) とののしられながら兵士に「追い立てられた」(‘they drive him’) 末、処刑された話によって怨恨の炎をかきたてられた St. Antoine の人々が起こした革命が彼らの怨念までも晴らしたのではなかったか。‘drive’ に ‘drive’ をもってする歪められた人間性の戦いは Carton の ‘drive away!’ の願いが果たされることで回復の道を開かれた。フランスで起きた家族にまつわる怨念の葛藤が、Carton, Lorry, Miss Pross という三人の独身のイギリス人の手によってイギリスへ「逃げる」(‘drive away’) ことで終わらせられるということは、呪いに変わり得る家族の愛の問題に対して「逃避的」な解決法だと言うことはできる。しかし、我々は唯一人 Carton によってのみ愛を込めて使われた ‘drive’ という言葉の力を信じることができる。‘go faster’ (p. 339) という Lucie の願いにもかかわらず、Lorry が嫌疑を恐れて速く走らせ

なかった馬車の速度は Carton が回帰したセーヌの「強く、素早く、深く、そして着実な」流れの速さに違いない。Mme. Defarge の命を奪った彼女自身のピストルの「火花と銃声」(‘a flash and crash’ (p. 351)) を表す、その同じ言葉が Carton の命をも奪った時⁽²⁷⁾、鳴ったはずの ‘Crash!’ という音はこの時、聞かれず彼は無音のうちに大きな波に呑み込まれ「全てが流れ去る。」(‘all flashes away’ (p. 375)) セーヌの流れに呑み込まれる小さな渦に自分の姿を見た Carton ならば、この時、彼を襲った波が寧猛な好奇心にかりたてられた人々の波であろうと ‘congenial’ と感じていたであろう。この波に「溺れた」彼には永遠を収める一瞬の予見が許されている。⁽²⁸⁾ ‘I see’ の反復は、彼が永遠の循環に組み込まれたことを示す波のリズムである。しかもこれは仮定的なビジョンであって文字として「固定」されることを拒絶している。この波動の永遠性は決して「終わり」ではない Carton の死と小説の結末によって約束されている。⁽²⁹⁾ Carton が自らの死によって仕上げる「彼の物語」(‘[my] story’ (p. 358)) はまさにその死の瞬間に繰り広げられ、Dickens がその「Carton の物語」によって仕上げた『二都物語』こそ「Carton の物語」であるからだ。確かにこれは「終止符」(‘period’) から始まる物語であり、我々はそこに二人の作家によって様式化された永遠の美を見ることができる。そしてそれは飽くまで ‘A Tale’ として語り継がれる (‘[I] hear [him] tell the child [my] story’) べきもののなのである。

(注)

使用したテキストは The Oxford Illustrated Dickens 版 Charles Dickens, *A Tale of Two Cities* (London: Oxford Univ. Press, 1987), 以下 *TTC* と略す。本文引用は括弧に入れて頁数で示す。

- (1) A. D. Hutter, “Nation and Generation in *TTC*,” *PMLA*, 93 (1978), p. 452.
- (2) 例えば John Kucich は次のように言っている。‘The crowning irony in Carton’s violation of Darnay’s identity and his claim to Lucie’s admiration is that

Carton is the one who projects the others future in the last paragraphs of the novel, while both Manette and Darnay are lying in a coach, impotent and unconscious.' *Excess & Restraint in the Novels of Charles Dickens* (The Univ. of Georgia Press, 1981), p. 119.

- (3) 広島経済大学研究論集, 第15巻第2号。
- (4) 'Darnay is a mere walking gentleman.' M. Slater, *Dickens and Women* (Dent & Sons Ltd, 1983), p. 279.
- (5) ジョン・フォスター (著) 宮崎孝一 (監訳) 「チャールズ・ディケンズの生涯」 (下) 研友社, p. 251.
- (6) これは M. Lambert の指摘である。 *Dickens and the Suspended Quotation* (Yale Univ. Press, 1981), pp. 128-129. ただし、彼はこの箇所を Dickens のいわゆる 'darkness' ではない 'coldness' の点から論じている。
- (7) 'the dramatic master of the last part of the novel' となる 'Dickens' stand-in' としての Carton については、C. R. Vanden Bossche, "Prophetic Closure and Disclosing Narrative: *The French Revolution and A Tale of Two Cities*," *DSA*, vol. 12 (1983), p. 216.
- (8) このように乱用されたこれらの慣用句は後に Carton と narrator 両者によって本来の意味を回復する。

釈放後に Carton に乾杯を求められ、'What health? What toast?' とはぐらかす Darnay に対し、Carton は 'Why, it's on the tip of your tongue.' と追及して、彼から 'Miss Manette, then!' (p. 78) という正直な答えを引き出す。この句を適切な場で正しく用いることによって、彼は Darnay の曖昧さと同時に弁護士としての乱用を批判している。

一方、Stryver に関して narrator の次のような記述がある。'...however late at night he sat carousing with Sydney Carton, he always had his points at his fingers' ends, in the morning.' (p. 80)

この句も又、その正しい使い方と Stryver が「要領を得ている」のは Carton のお蔭だという事実によって Stryver と弁護士一般への批判となっている。

- (9) 'gentleman' に関しては、Garret Stewart, *Dickens and the Trials of Imagination* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1974), pp. 25-26, pp. 217-218.
- (10) Carton の美点については、J. Kucich, *op. cit.*, pp. 171-172.
- (11) これと同じ表現法が Stryver に対しても用いられている。精神的にも肉体的にも出しゃばる彼に似て、'Stryver' という語も、'business' 同様、他のものを押し退けて前へ出て来る。仕事への忠誠に対する敬意も込められた Lorry の場合と違って出世街道をひた走る Stryver の場合は皮肉な意味合いしかないが、その最も明らかな例として 'the Stryver principal' (p. 81) が上げられる。「本人」

(‘the principal’) の前にまで出しゃばった ‘Stryver’ という語は、Stryver himself を消してしまった。

- (12) ‘life’ を両義で使って、わざわざ ‘in two senses’ (p. 75) と断る Darnay と対照的だ。
 - (13) Carton という名からは色々な連想が働くが、John Gross は Carton と *Bleak House* の Richard Carstone を同じ ‘the cultivated wastrels’ の系譜の中で捕えている。‘A Tale of Two Cities,’ in *Dickens and the Twentieth Century*, ed. Gross and Pearson (Toronto: Univ. of Toronto Press, 1962), pp. 189-190. 後に本論で Carton が石化の呪いを払うことについて述べるが、彼は「人生に出る」つもりで空しく死んだ Carstone の雪辱も果しているのではないだろうか。
 - (14) この皮肉は Carton が最終的に Memory としての永遠性を与えられることによって、Stryver に跳ね返って来る。それが作者が題名の候補の一つとして考えていた MEMORY CARTON の意味でもあるだろう。発掘のテーマに照らせば、およそ発掘されるもののうちで最も美しいもの一思い出—という名で、既にこの時 Carton は呼ばれているわけである。
 - (15) J. Kucich は Stryver と Carton を ‘economically conservative villains’ 対 ‘violent, self-expending villains’ という対称の二組に上げている。J. Kucich, *op. cit.*, p. 62. 他に Stryver を ‘Carton’s real thematic opposite’ と考えているのは、B. F. Herst, *The Dickens Hero* (Weidenfeld and Nicolson, 1990), p. 147.
 - (16) G. Stewart, *op. cit.*, p. 39.
 - (17) Pip の ‘I see’ に関しては Randolph Quick, “Some Observations on the Language of Dickens,” *A Review of English Literature*, vol. 2, no. 3, 1961, p. 23.
- David の ‘seeing’ に関しては、J. P. McGowan, *Representation and Revelation* (Univ. of Missouri Press Columbia, 1986), p. 105.
- (18) しかも、この嵐の晩の電鳴の ‘flash’, ‘crash’ は Carton と Mme. Defarge の死の場面に共通して用いられる言葉である。
 - (19) この後、およそ100ページの中で ‘Mr. Lorry’s business eye’ (p. 284) の一例に留まると思われる。
 - (20) この脱落はあと一度、最後の検閲の場面 (p. 338) に起こる。検閲官の読み上げる許可証の記述にならって、narrator が Jarvis Lorry という呼び方を用いた叙述を三度繰り返すことで緊迫した空気を伝えることに成功している。
 - (21) narrator 及び Carton 自身の「仮定法」に関しては C. H. Mackay, “The Rhetoric of Soliloquy in *The French Revolution* and *TTC*,” *DSA*, vol. 12 (1983), pp. 202-203. と V. Bossche, *op. cit.*, p. 211. ただし、二人の見解は一致していない。筆者は前者に近い意見だ。

- (22) この聖句と「記憶」については A. Welsh, *The City of Dickens* (Harvard Univ. Press, 1986), p. 110.
- (23) 侯爵とカートンの死の関係については G. Stewart, "The Secret Life of Death in Dickens," *DSA*, vol. 11 (1983), pp. 184-185.
- (24) 兄の侯爵に関して次のような描写がある。'There was no touch of pity, sorrow or kindred humanity' (p. 308)
- (25) '[Carton] rejects the one temptation to destroy her by force—and destroys the corruption in her spirit and all its evil effects by allowing her to destroy him in the flesh.' W. H. Marshall, 'The Method of *TTC*,' *The Dickensian*, vol. 57 (1961), p. 189.
- (26) 'And Lorry whose name is an ominous pun on the tumbrils in Paris, is a symbol of the underlying price paid by repression; Lorry repeatedly saves people only at the cost of abandoning others to violence...before the time of the novel, he rescues Lucie only by leaving Manette behind; at the end he saves Darnay by leaving Carton to die.' J. Kucich, *op. cit.*, p. 117.
- (27) 二人の死における 'flash' と 'crash' については、G. Stewart, "The Secret Life of Death in Dickens," p. 186, pp. 188-189.
- (28) このパノラマに関しては、Catherine Gallagher, "The Duplicity of Doubling in *TTC*", *DSA*, vol. 12 (1983), p. 132.
- (29) カートンの最期と小説の最後のアナロジーに関しては、Gallagher, *ibid.*, p. 136. G. Stewart, "The Secret Life of Death in Dickens," pp. 189-190.